

SEAMAIL 原稿

SEA の新しい代表幹事として

1999 年度からの SEA の代表幹事をお引き受けすることとなりました。

私は SEA の設立時から参加し、学会でもなく業界団体でもないという組織の存在意義を大いに評価してはきましたが、正直なところこれまでその活動への貢献度はあまり高いものとは言えなかったと思います。歴代の代表幹事は皆個性豊かで、傑出した指導力をお持ちでしたが、私にはその資格も欠けるように思われます。そこで最初に代表幹事をやらないかというお話があった時、自分としてはかなり強くお断りしたつもりでした。

しかし、前代表幹事の坂本さんと、やはり元代表幹事で敬愛する山崎さんが、わざわざ私の研究室にお見えになって代表幹事をやるように要請され、逃げ場を失いました。その上でお引き受けしたのは、かえって勿体をつけたようで今から思えば赤面の至りです。

6 月の盛岡におけるソフトウェア・シンポジウムの期間中に開かれた総会で、新代表幹事としてご挨拶するための材料として引っ張り出してきたのが、SEAMAIL の創刊号です。1986 年 1 月に発行された第 1 巻第 1 号。編集人は岸田孝一となっています。思えば創刊号以来、SEAMAIL はほとんど岸田さん一人に頼りきりできたわけです。

巻頭に「ソフトウェア技術者協会の設立にあたって」というマニフェストがあります。続いて、「SEA 設立によせて」として、当時の通産省情報処理振興課長やら日本ソフトウェア科学会理事長やら富士通や日電の常務やらの祝辞があります。次は「シグマに関する誌上討論」として、主にシグマ・プロジェクトの関係者の意見を載せています。シグマは 1985 年の 10 月に発足したばかり、というタイミングだったのです。すでに終了したシグマは決して成功したとはいえないプロジェクトだったと思いますし、SEA のメンバーは当初から批判的な人がどちらかといえば多かったはずですが、創刊号のフォーラムがシグマだったというのは面白い気がします。

次も岸田さんの企画と思われませんが、「プログラマ!」という欄があります。その前書きでいわく、

「このコラムでは、スタッズ・ターケル著<仕事!>やスタジオ・アヌー編<子供!>（ともに晶文社刊）にならって、プログラマたちの生活と意見を収録してゆくつもりです。毎号 4 人ずつの会員にインタビューする予定ですので、よろしく(編集部)」

実際、その後も何号かこの欄は続けられました。

さらに、これはSEA設立事務局 岸田孝一の署名入りで、「設立に至る経緯と当面の活動方針」という文章があります。「1985年12月20日という日付は、日本のソフトウェアの歴史に永久に記録されよう。その夜、SEAの設立総会が開催される。」という、岸田さんらしからぬ(?) 昂揚した表現が見られます。しかし、この1985年は、阪神タイガースが21年ぶりに優勝した年であることを思い起こす必要があります。東京生まれ東京育ちの岸田さんは、なぜか虎キチです。もしかするとSEAの設立そのものが、阪神優勝の興奮の産物として生まれたものかもしれません(事実は、設立までに長い助走期間があったことが、同じ文章の中で語られています)。

SEAの発足と同時に、環境、AI、ネットワーク、教育、管理の5つの分科会をスタートさせていること、また関西支部を初め地域単位の支部が活動を開始していることも分かります。このように中央集権的でなく、分野や地域で自主的な活動が行われることがSEAの当初からの特徴であったことが改めて認識されます。一方で、会則の細則として、7つの常設委員会(企画総務委員会、技術研究委員会、会誌編集委員会、セミナー委員会、シンポジウム委員会、ワークショップ委員会、事業委員会)を置くことが定められていますが、これらはその後、予定通り機能しなかったようです。SEAという組織には委員会という形式が馴染まなかったということでしょうか。

SEA設立後、やがて14年です。この間、阪神の優勝は一度もありませんでした。SEAの活動にも多様な変化がありましたが、基本姿勢には変わりはないと思われますし、むしろそのことは積極的に評価すべきことでしょう。しかし、課題もいろいろあると思われます。会員数は毎年漸減しており、現在約500名とのこと。それでもコスト削減の努力で、財務状況はとくに悪化しているとはいえないようです。多くの人の意見では、最大の問題は会員の絶対数の減少よりも、若い層の比率が低下していることだといいます。創立時の会員の年齢構成がそのまま14歳年をとったというわけではないにしても、生きのいい若手の新規加入が減っているのは確かなようです。

このことは、SEAに限らず世界的にソフトウェア工学の研究者や技術者の集まりで、かなり前から言われていたことです。ソフトウェアの世界には、作り手としても使い手としてもどんどん若い世代が入ってきている一方で、ソフトウェアの技術を意識的に考えようとする人が増えていかないのだとすると問題です。SEAの組織として新陳代謝がかなりうまく機能していることは、岸田さんの後の歴代の代表幹事の顔ぶれを見ても、熊谷、山崎、中野、坂本と、いずれも設立時のメンバーではないことから言えるかもしれません。それがさらに若い層をとりこむように機能するための方策を、皆さんと共に考えていきたいと思えます。